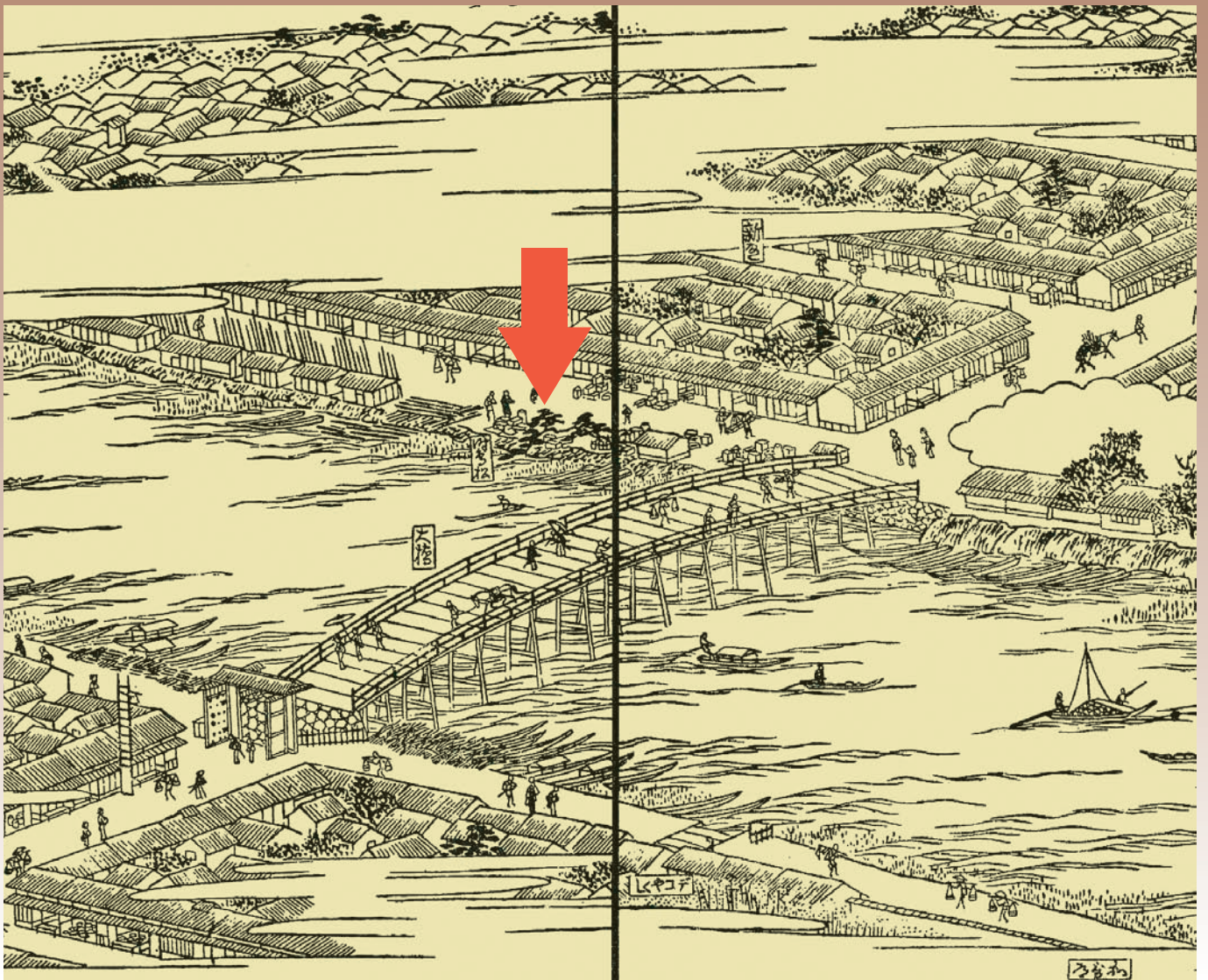


和歌山県立

もん じょ かん

# 文書館だより

第47号 平成26年11月



『紀伊国名所図会』初編巻一の「大橋」の俯瞰図(部分)

# 『紀伊国名所図会』初編「時鳥松」を読む

## ◆「時鳥松」とは

表紙に掲げた図は『紀伊国名所図会』初編卷之一上(以下「名所図会」)廿七丁に登場する絵図です。

この図は大橋を中心に街並みを俯瞰したもので、朱の矢印で指し示した所に時鳥松と小さく記されています。

この図で見ると「時鳥松」があった場所は和歌川に架けられた大橋東詰めの北、新通一丁目の川岸だったということが判ります。

大橋の西詰めには大橋御門が見え、その左側に番小屋が建てられています。東詰めにも番小屋が見えますが、門はありません。

したがって、この頃は大橋の西詰めまでが城下町であったということになるのでしょうか。さらに、この西詰めの南北の通りが和歌道であり、東詰めの通りが紀三井寺道です。

ところで、大橋のことは田中敬忠氏の『紀州今昔』の二三頁に、広瀬大橋とも郭公橋とも呼ばれていたとされています。



郭公橋と呼ばれた理由は郭公松が明治中期頃まであったからだろう、と推定されています。この指摘にしたがえば郭公松は随分長く繁茂していたということになります。

また、三尾功氏の『近世都市和歌山の研究』によれば、近世の大橋の長さは時期によって多少の違いはあったものの、三七間三尺五寸(一間一・九メートル)で換

算すると、約七四メートル)、幅は二間三尺五寸(約四メートル)あったとされています。これは、昭和六十二年に架け替えられた現在の大橋の長さが三八メートルですから(和歌山県道路橋集覧「第三巻」、和歌川の川幅が都市計画やさまざまな災害のためにかなり狭められたことを物語っています。

観光名所だったことが判ります。ですから、見物客が後を絶たなかったことを物語っているのでしょう。この時鳥松のことについては、同じ巻の廿九丁で、「郭公松」として大橋の東詰なる少しく北の川岸にあり、枝葉繁茂して、千載の蒼翠常に色をかへず、実に奇観というべし、名義は土屋氏の記にゆづりて又贅せずという解説がなされています。

また、二人の商人が立て札の前で興味深げに松を見物している様子が描かれています。

「時鳥」も「郭公」もどちらも「ほととぎす」と読みます。この解説でも、時鳥松は大橋の東詰の少し北の川岸にあって、長い間青々と茂って、その色を変えることのない不思議な松である、と語っています。

また、「時鳥松」と呼ばれて親しまれるようになった経緯については、既に土屋氏がものした物語があるのだから、ここでは敢えて余計なことを言うことは避けましょう、としています。

## ◆「郭公松の記」を読む

「郭公松の記」はカナが七二七文字とふりがなが付いていない漢字九文字とで構成されています。漢字を除いて音(おん)は四八文字ですが、この七二七文字には七八通りのカナが使われています。

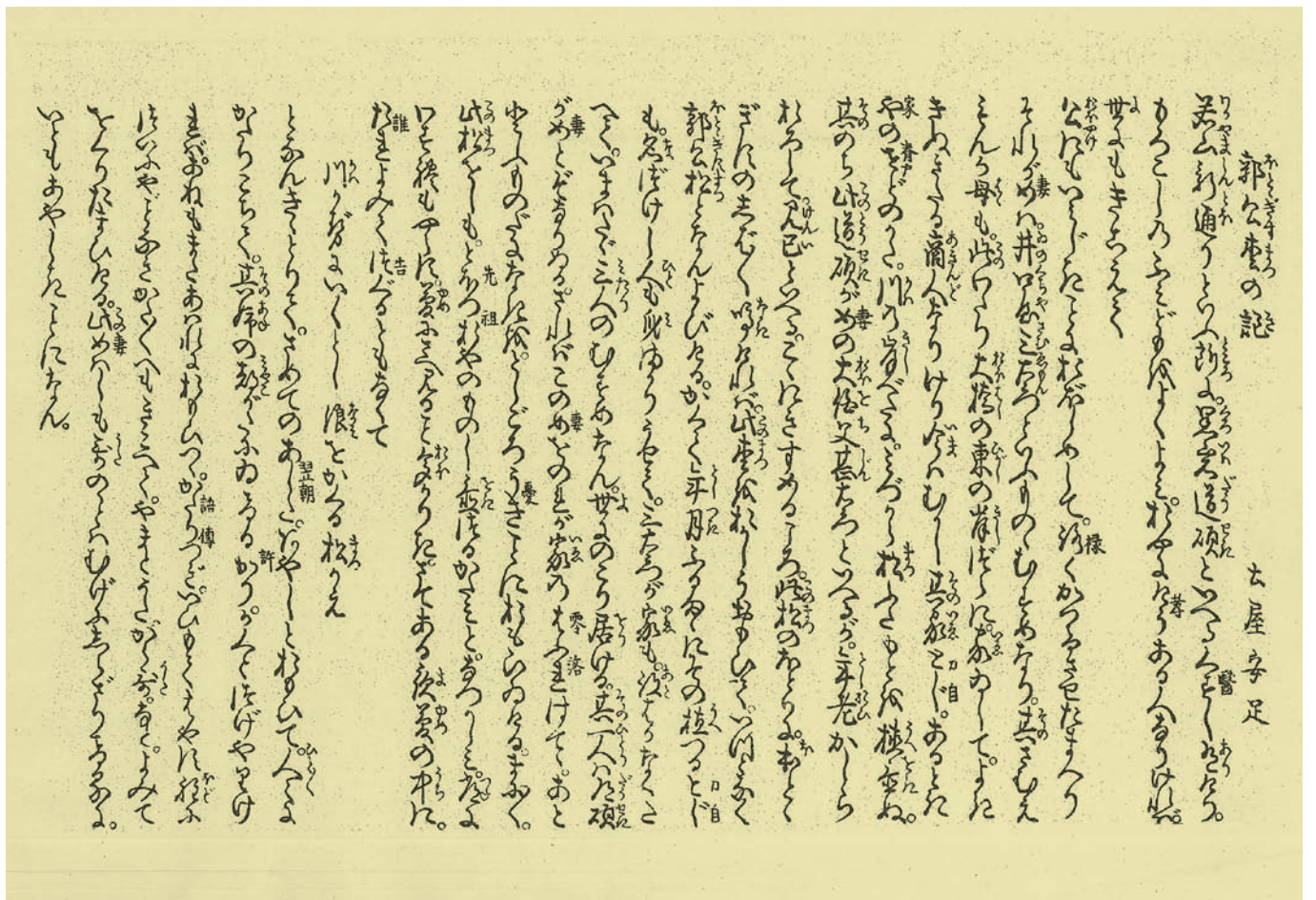
なお、合字(または連字とも)が七箇所、重点(かさね字・おどり字とも)が一五箇所含まれていますので、その点にも注意しなければなりません。

## 「郭公松の記」 土屋安足

和歌山新通りに黒岩道碩という町医者



『紀伊国名所図会』初編卷一「時鳥松」の図



(IIくすし)がいましたが、この人は漢方医学にも詳しく(IIもろこしのふみどもをよくよみ。一般的には漢詩等を指しますが、ここでは漢方の医書と解釈する方が妥当でしょう)、親孝行人人でもあったので、世間でも評判になって(II世にもきこえて)、藤でも(II公にも)たいそう立派なことをする者だとお感じになられて(IIいみじきことにおぼしめして)、褒賞を与えられました(II禄かつきさせたまへり)。

道碩の妻は井口屋三右衛門の娘でしたが、その三右衛門の母親も大橋の東岸付近に住まいした(II家あして)裕福な(IIよききぬきたる)商人でした。

今から相当昔のこと、この祖母(II家刀自)が自分の家の勝手口の川岸に二本の松の株(II松ふたもとを)植えました。(II図では一本のように見えますから、一本は枯死してしまっただけでしょうか)。

その後、年をとって出家して(II年老かしらおろして)見巳と名乗った大伯父がその地にやって来て住んでいた頃、大きく育ったこの松の近くに時鳥がやってきてはよく鳴くので、風情があるものだと思います(IIおかしうおもひて)、何時の頃からか、郭公松と名付けました。

そうして、長い年月が経って松を植えた祖母(II刀自)も、郭公松と名付けた見巳も死んでしまい(II身まかりうせて)、妻の実家も絶えて(IIをのれが家のはふれはてて)しまいました。それで道碩の妻は家の前に育った松は先祖が残した形見であるのに(IIとほつおやのものしをきつるかたみとなつかしみ)、その跡を

訪れる人さえないことを(あととふものだになきを)、ずつと悲しんで(IIとしごろ愛きことにおもひ)夢にまで見る日々が続きましたが、ある夜の夢のお告げに、川かぜにいくとし浪をかくる松かえ(II川風に何年も何年も浪をかぶつてきた松の枝なのだなあ、というほどの意味でしょうか)。

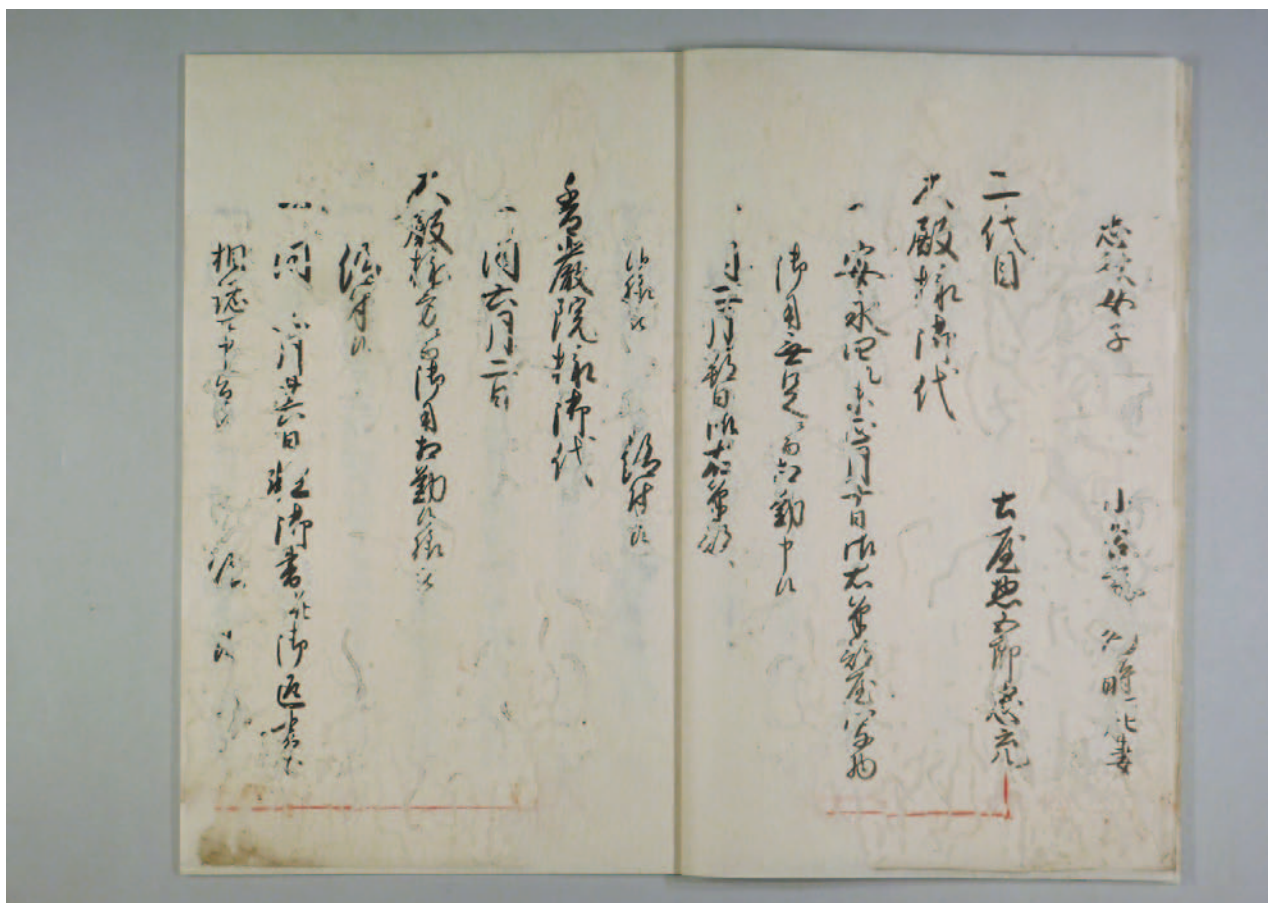
と聞いたような気がして(とんなき、とりて)、翌朝(IIさめてのあした)不思議な(IIあやしと)こともあるものだと、思っただけの人々に言っただけ(IIかたりこちて)、都の方に行っている姉にもかくかくと手紙で知らせると、姉もまた興味深く思っ(IIあはれにおもひ)、色々な場所(IIあはれにおもひ)でこのことを言い広めた(IIいひもてはやすほど)ので、ついに、高貴な(IIやごとなき、止事無)やんごとなき)方々の耳にも入って、その方々がお詠みになった和歌や漢詩等(IIやまどうたから歌など)を贈られました。

ところが、この妻は歌の意味など話にもならない(II無下に・無気に)ほど知らないものですから、あまりにも(IIいととも)とてもをさらに強めて(IIいととも)思議な出来事です。

という風になろうかと思えます。少し小さくて読みづらいかも知れませんが、本文を掲げましたのでここでは要約をしました。また、その意味を表す原文を適宜(II)に入れて補うことにしました。

◆「郭公松の記」の作者

ところで、本文にも入れましたが「郭



土屋一郎が文政2年に提出した「土屋総五郎忠充」の系譜(部分) (当館蔵『紀州家中系譜並に親類書書上げ』資料番号 9049)

公姿の記」の作者は土屋安足つちややすたしという名前の紀州藩士ですが、『藤垣内翁略年譜附教子名鑑』に「土屋惣五郎安足」という名前が登場しています。さらに、同じく本居大平門で、『名所図会』や『紀伊続風土記』の編纂にも携わった加納諸平編の『類題和歌鯁玉集』二編の雑の部にも一首だけ「土屋惣五郎安足」の歌が採用されています。

ところで、当館所蔵の土屋家系譜(資料番号九〇四九)によれば、惣五郎を名乗った人物は、初代であった父惣右衛門忠秋の長男しかいないのですが、この惣五郎の本名は忠充となっています。この惣五郎忠充は安永四年(一七七五)正月、無足のまま御右筆部屋写物御用を仰せ付けられて出仕しますが、その後次第に累進して天明元年(一七八一)六月に御右筆本役となり、寛政九年(一七九七)に大御番格、文化五年(一八〇八)に御小姓組格にまでなります。そして、文化八年五月漸く家督を継ぎ、文政二年(一八一九)閏四月、六三歳で病死しています。またこの間、文化三年には紀伊続風土記の新撰御用を仰せ付けていますが、文化八年三月に

(前略)新撰之儀暫相止候付右御用筋相勤候得共不及其儀候

とあって、藩の事情で風土記の編纂は暫く延期するのでこの御用を続ける必要はない、と命じられてしまいます。したがって、五年間続けた御用ですが続風土記の編纂に加わった人物の中にはこの名は見つかりません。

とは言え、本居大平門下の文化人で続

風土記新撰の御用にも携わった人物が土屋惣五郎安足であり、「郭公姿の記」をものした人物でもあるとしても、何の不思議もありません。惣五郎忠充こそ安足という歌号を使用していたと考えられます。

◆黒岩道碩について

この「郭公姿の記」の主要な登場人物は、黒岩道碩・同妻・その親井口屋三右衛門・道碩の妻の祖母・同じく妻の大伯父甚右衛門(出家して見已と称す)・三右衛門の娘二人(道碩の妻を除く)等ですが、ここでは、黒岩道碩について述べてみましょう。

彼は、「南紀忠孝畧伝」(『南紀徳川史』第七冊 四七七頁)に次のように登場しています。

ここでは適宜、旧字体を新字体に改め、必要などころには振りカナ・句読点を付け、( )内に語彙の説明を入れています。

黒岩道碩は若山新通り町の医師也。

幼して父を喪ひ、母に能事へり。母

老且病て打臥ぬるを昼夜侍養(そばに

付き添って孝養を尽くすこと)怠らず。

夜は傍に寝ぬ(「ぬ」は「ね」の誤りカ、

傍に寝て)、母の尿する時は自ら扶け

て行、食物に好む所あれば則(すぐに)

でも之を進め、母生雷を畏れぬれ

ば(怖がついたので)、若空搔曇り雷

鳴らむ(ん)とする時は診察をも断り傍

をはなれず。雷鳴轟くときは家内残

らず打圍て其畏れを慰めぬ(慰めてい

た)。母本より(元来)神仏を信じ、老

後も折々参詣する時は、途中にてさま

ごまいたわり、時々母の代調(代わつて)神仏に詣(ま)でること)をも勤め、療治に出るにも昼は暮六つ時(午後六時頃)、夜は四つ(午後一〇時頃)を限り、又会計足らざる時も(家計が苦しい時も)余りある体に(余裕があるように)見せ、心を安(やす)じさせ何事も母の指揮(指示)をうけ、年来(いつも)懈(た)らざりしかば(懸命に尽くしていたので)、寛政元年(一七八九)、官より(褒美として)白銀を賜(たま)へり。

というものです。これで、黒岩道碩は第九代藩主治貞の治世期に顕彰されたことが判ります。またこれは、土屋安足による『郭公姿の記』の冒頭四行目までの内容を詳しく記したものに他なりません。ですから、二人とも実在の人物であるとともに、少々脚色はあるでしょうが、郭公松の記も事実であったことも判ります。

◆「郭公姿の記」の成立時期

ところで、帯屋伊兵衛こと高市志友に藩当局から『名所図会』の出版官許が下りたのは寛政八年(一七九六)ですが、『名所図会』の初編三巻五冊が刊行されたのは文化八年(一八一二)五月ですから、この「郭公姿の記」はそれ以前に成立していなければならぬこととなります。

前掲の「土屋家系譜」は傷みが激しく判読しづらい箇所がいくつかありますが、土屋惣五郎は二度の江戸詰め御用の後、寛政元年十一月に香巖院様(第九代藩主治貞)の御供をして和歌山に帰って来たという記録が見えます。したがって、この物語の成立の時期にあたりと考えられ

るのは、黒岩道碩が母への孝養によって褒賞された寛政元年以降ということになります。

しかしながら、当時の書物の出版までの手間(原稿または草稿を付した形での出版許可申請→町奉行所からの許可→下書き→彫刻→数回の校正→刷り→綴じ→前後の表紙付等、書物の種類によって順番は必ずしも決まっている訳ではありませんが)に要する時間等も考慮に入れなければなりませんし、さらに、板元である高市志友は初編三巻五冊と二編三巻五冊の草稿を、ほぼ同時に書き上げていた可能性があることも考えなければなりません。

こうした大量の草稿を書き上げるために、高市志友が何年度の期間を費やしたのかは判りかねますが、おそらく寛政八年の開版官許が下りる以前から、彼は草稿の準備を始めていたに違いない筈です。ということになると、文化年間の成立ということでは遅過ぎるように考えざるを得ません。

とにかく、『名所図会』中の「郭公姿」の解説と黒岩道碩の孝養や、二頁の図に見える見物人等を考え合わせると、この「郭公姿の記」は『名所図会』初編が出版された時には、既に大いに人口に膾炙していたように思われます。

したがって、結論的に言うならば少々推定期間は長くなりますが、寛政二年以降で享和年中(一八〇一―一三)までではないかと考えられます。もともと、残念ながら肝心なことが判りません。それは郭公姿がいつ植えられたのかということ。 (須山高明)

平成二十六年度  
二つの共同調査

当館は、和歌山県内外の他機関が行う二つの調査事業に参加し、共同で県内の古文書(民間所在資料)の情報を収集しています。



明治22年日高川水害記念碑の調査  
(日高郡日高川町若野)

**地域に眠る「災害の記憶」の発掘・共有・継承事業(文化庁補助金事業)**  
文化庁平成二十六年文化芸術振興費補助金による「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」として和歌山県立博物館を中心に行う「あらゆる人びととつながる博物館づくり事業」の一つで、和歌山県内に伝わる過去の災害に関する記録や記念碑、言い伝えなどを再確認することによって改めて今後の教訓とし、併せて地震・津波被害が想定される地域の古文書など文化財の所在調査を行う事業です。



安政地震(1854年)記録の調査

同館のほか、県教育庁文化遺産課や県外の研究者、被災歴史資料の救出・保全を行うボランティア団体「歴史資料保全ネット・わかやま」と共同で資料の掘り起こしを行っています。古文書に限らず、仏像や石碑も対象とするほか、自主防災組織の現在の取組についても聞き取り調査を行っています。

調査対象地域は、御坊市・日高郡美浜町・同郡日高川町及び東牟婁郡那智勝浦町です。平成二十七年二月二十八日(那智勝浦町)及び三月一日(御坊市)に現地学習会を開催予定です。

和歌山県北部地域所在中世史料の調査・研究(東京大学史料編纂所一般共同研究)

史料編纂所のほか、県立博物館や和歌山県立博物館の中世史研究者と共同で高野山麓(伊都郡・那賀郡・有田郡)の中世古文書を中心に調査・撮影します。所蔵者の許可を得た古文書の写真は、当館で公開する予定です。

パネル展示の紹介  
紀州茶の湯さんぽ—近世城下町編—

パネル展示では文化・文政期頃(二八〇四〜三〇)に和歌山の城下町近辺で栄えた、茶の湯に関する遺跡をご紹介します(写真1・図1)。



写真1 パネル展示の様子

◆茶の湯が仕事

紀州藩には「御教寄屋頭」(寛政五年、一七九三までは「御茶道頭」という役職があり、茶の湯と儀式・平素における座敷の飾り付けと、そこで使われる道具類の管理を仕事としていました。千・中野・川合・千賀・室・住山の六家がつとめ、現在に続く和歌山の茶の湯文化発展の基礎をつくりました。  
なかでもよく知られているのが、千家です。「表千家」といえば、御存知の方も多いでしょう。以後、本文でも表千家の呼称を用います。

◆紀州藩と表千家

紀州藩と表千家の関係は、寛永十九年(一六四二)初代藩主頼宣によって、千利休のひ孫であった表千家初代となる江岑宗左が召出されたことにはじまり、以後代々の表千家家元は紀州藩に召し出されることとなります。

九代家元の了々斎は、寛政十三年(一八〇一)から御教寄屋方の見習いをはじめ、文化元年(一八〇四)先代啜啄斎の跡を継いで「御教寄屋頭上座」を仰せ付けられ、文政五年(一八二二)には京都の表千家屋敷に十代藩主治宝の御成を迎えました。

治宝は寛政元年(一七八九)に紀州藩主に就き、文政七年(一八二四)に隠居、没する嘉永六年(一八五三)まで藩政のみならず、文化に対しても多大なる影響を与えた存在でした。

了々斎は治宝に対して真台子点前を伝授、いわゆる免許皆伝をおこなっていることから、両者は藩主と家臣を超えた師弟関係にあった、といえるでしょう。

◆表千家屋敷址

『南紀徳川史』によると、表千家は京都に住むことが許されており、藩の御用がある時に限って紀州や江戸へ出仕していました。

紀州における表千家の屋敷地は『旧和歌山藩土族名簿』(和歌山県立図書館蔵)では、「三木町堀詰」となっています。表

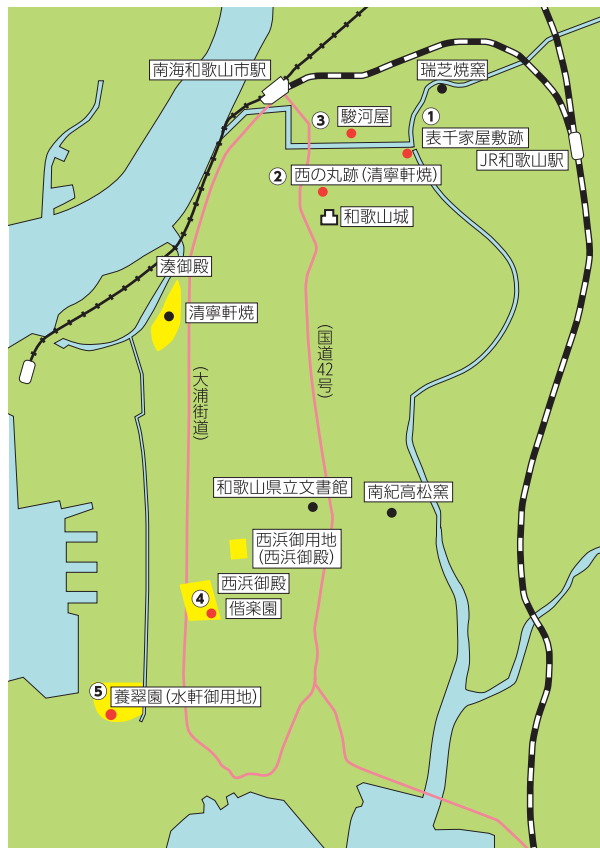


図1 和歌山市内茶の湯関連遺跡  
①表千家屋敷跡、②西の丸、③駿河屋、④西浜御殿、⑤養翠園

千家の家譜(紀州家中系譜並に親類書書上げ)、資料番号七五六六(六九)のなか、屋敷地を拝領したという記録はなく、また伝来する城下町絵図(写真2)にも記載がないため、いつこの地に屋敷を構えたか、よくわかっていません。  
ですが、江岑が屋敷の普請の際に残った杉・檜・樅の木でつくられた「三木町棚」という道具が伝わっていることから、遅くとも江岑が没する寛文十二年(一六七二)までに、普請は終わっていたと考えられます。

現在、堀詰橋のもとに表千家屋敷址の碑がありますが、戦後おこなわれた区画整理のため、江戸時代にあった屋敷地から少し離れた場所に建てられています(写真3)。とはいえ、京や城への往復に、了々斎もこのあたりを歩いたことでしょう。



写真2 和歌山絵図 部分  
(当館寄贈早川家文書 資料番号45)

▲が屋敷のあった場所。星印に屋敷址碑が建つ。



写真3 表千家屋敷址碑

◆城でのつとめ

和歌山城内には、西之丸に三つ(図2 水月軒、聴松閣と、現在紅松庵が建つ場所にあった一棟)と二之丸に一棟の「御数寄屋」つまり茶室がありました。西之丸は現在の紅葉深庭園、二之丸は当時大奥で、御数寄屋頭は御用の時に大奥へ出入りすることが許されていました。

了々斎や御数寄屋頭が、具体的にどのような仕事をしていたのか、当館で所蔵する藩政資料のなかに残されていないため、詳しいことはよくわかりません。

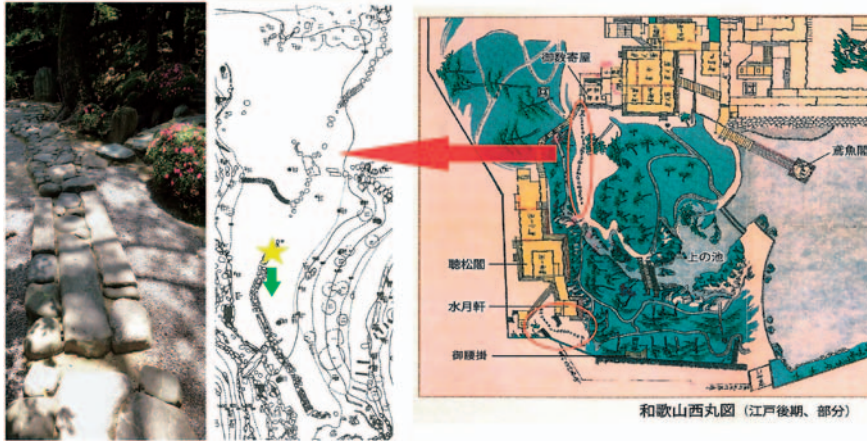


図2 右:和歌山城整備企画課「名勝西之丸庭園」パンフレットより  
赤丸で囲んだ部分が飛石。畳石は描かれていない。  
中:和歌山市公園課発行『史跡 和歌山城紅葉深庭園整備報告書』  
現況実測図(整備前、部分) 星印が撮影地点、矢印が撮影方向。  
左:畳石部分の現状写真。  
畳石とは、小さい石を並べて長方形に形成した舗石道のこと。延段。

しかし、幸いにも東京国立博物館に『台子并棚飾図』という、紀州藩士が記録したと考えられる資料が伝わっており、当時の様子がかがえます。そこには、文化十二年(二八一五)に、西之丸の御数寄屋と御腰掛の飛石の作事が了々斎へ仰せ付けられた、とあります。

文化十二年亥九月廿二日  
一 数寄屋長路次之節ハ、飛石計長々と  
続きにも無興なるもの故、右体之所へハ  
左へ之石壺間程か又ハ壺間半位も交せし  
方宜敷候よし。

た々石を二尊院と申  
候由、了々斎申候。

嵯峨ノ二尊院と利休附候  
畳石有之ニ付、本文之  
通申候由咄し候事。

右此度西丸御数寄屋御  
腰掛飛石了々斎被仰付  
附候節之物語也。

図2の「和歌山西丸図」  
(文政八年頃の作)では、  
御数寄屋への露地に飛石  
ばかりが長々と続く様子  
が描かれています。その  
ようなところへは左の方  
へ少し離して置く石を交  
ぜるのがよいとし、同時  
に畳石と利休に関する逸  
話を了々斎は披露して  
います(ちなみに二尊院  
ではなく西芳寺の誤り)。  
現在もみられる畳石と、  
了々斎は何か関係はある  
のでしょうか。

◆治宝好み

「数寄の殿様」と言われる治宝は、自身の趣向で茶道具や菓子を作らせました。こうした特定の人物によって注文・制作されたものを「好み物」といいます。

治宝の好み物を代表する一つが、落雁(干菓子)でした。紀州藩では、寛政十二年(一八〇〇)以降、砂糖の生産が盛んになってくることから、落雁がつくられるようになったと考えられます。その制作を任されたのが、駿河屋でした(図3)。駿河屋製の菓子は藩の茶会でも用いられていたことでしょう。

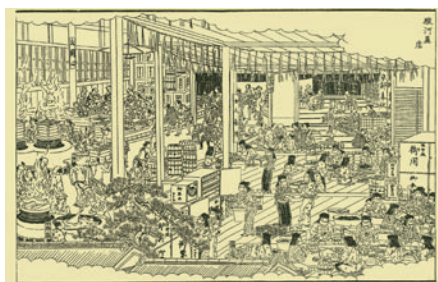


図3『紀伊国名所図会』より駿河屋

また、治宝は品物を注文するだけでなく、自ら制作に携わることもありまし  
た。それが文政二年四月(一八一九)、西  
浜御殿で了々斎や楽焼の製作者楽吉左衛  
門(且入)も参加しておこなわれた作陶、  
「偕楽園焼」です(写真4)。

この頃、紀州藩のみならず諸藩では、  
藩主の個人的な趣味による陶磁器(御庭  
焼)が作られていました。自分の思いの  
ままに使える窯の完成は、治宝にとって

待望の出来事だったようです。以後、文  
政十年(一八一七)、天保七年(一八三六)  
にも偕楽園焼がおこなわれました。

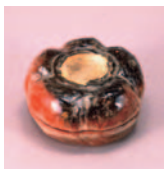


写真4 偕楽園焼  
赤楽捻梅香合  
(和歌山県立博物館蔵)

◆養翠園實際庵

西浜の養翠園にある實際庵(写真5)は  
了々斎好みの茶室といわれています。確  
かに家譜では了々斎の時代、享和三年  
(一八〇三)に「御数寄屋御出来」とありま  
す。しかし『南紀徳川史』によると、この  
とき治宝は参勤交代で江戸に滞在してお  
り、了々斎も御供していました。そうで  
あれば茶室が建てられたのは、江戸の藩  
邸だったのではないのでしょうか。



写真5 實際庵

これまでの調査から、移築された可能  
性も否定できないものの、了々斎の作っ  
た「御数寄屋」と現存する實際庵との関係  
についてはよくわかっていません。にも  
かわらず、了々斎好みと伝わるのは、  
いまままでご紹介したような、治宝と了々  
斎の二人が密接な間柄にあったため、と  
いえるでしょう。(砂川佳子)

平成二十六年年度 古文書講座I

七月から九月にかけて、古文書講座Iを開催しました。

今回題材にしたのは、昨年度に目録が完成した岡本家文書です。岡本家があった那賀郡神野組福田村(現紀美野町福田)は江戸時代を通じて高野山寺領でした。同家が高野山地主として関わった文書の中から、寺領の村で起きた数々の事件に焦点をあて、遊佐教寛研究員がわかりやすく解説しました。

各回の講座内容は、次のとおりです。

高野寺領事件簿

入門コース

第1回 銀子返并滞り 7月19日(土)

第2回 忍び目附も出し候

8月2日(土)

初級・中級コース

第1回 しも儀立返き申付け

8月9日(土)

第2回 戸を打破り躍り込み

8月23日(土)

第3回 火事と大いに呼び立て

9月6日(土)

「入門コース」には、延べ一十二名、「初級・中級コース」は、延べ一八四名の出席があり、アンケートでは七割以上の方から「興味深くおもしろかった」との回答をいただきました。

「入門コース」アンケートより



・時代背景をわかりやすく解説いただいたので理解が深まりました。  
・一文字一文字読み解いて行くのは根気のある作業ですが、読めた時の達成感が大きいです。

・講師の話が解りやすく、あっと云う間に時間が過ぎ、楽しく古文書と向きあえました。  
・先祖が属していた寺領の出来事についての内容だったので興味深く拝聴しました。

「初級・中級コース」アンケートより



・文字の読み解きもさることながら、内容が現代と通じるような感じで、江戸時代の人の息づかいが感じられるようでした。  
・回を重ねてくるとともに、興味が慣れてくる

も深まりました。  
・講座のテキストを復習しています。楽しく、孫達にも披露しています。

文書館の利用案内

利用方法



◆ 閲覧室受付にある目録等が必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。

◆ 閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。

◆ 複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

開館時間

◆ 火曜日～金曜日

午前10時～午後6時

◆ 土・日曜日・祝日及び振替休日

午前10時～午後5時

休館日

◆ 月曜日(祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日)

◆ 年末年始 12月29日～1月3日

◆ 館内整理日

・ 1月4日

(月曜日のときは、5日)

・ 2月～12月 第2木曜日

(祝日と重なるときは、その翌日)

・ 特別整理期間 10日間(年1回)

交通のご案内

◆ JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分

◆ 和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス

<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

和歌山県立文書館だより 第41号

平成26年11月30日 発行

編集・発行 和歌山県立文書館

〒644-1005

和歌山市西高松一丁目七-三十八

きのくに志学館内

電話 〇七三-四三六-九五四〇

FAX 〇七三-四三六-九五四一

印刷 株式会社ウイング